

大学生の心理的自立に影響する要因に関するパイロット研究 —半構造化面接による検討—

山田裕子¹⁾* 宮下一博²⁾

¹⁾東京学芸大学連合大学院教育学研究科・博士課程

²⁾千葉大学・教育学部

A Pilot Study of Factors Influencing Psychological Independence of University Students —Explored by Semi-Structured Interview—

YAMADA Yuko¹⁾ MIYASHITA Kazuhiro²⁾

¹⁾Doctoral Course The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究の目的は、心理的自立およびその発達に影響した要因に関して、大学生自身がどのように理解しているかを探究するために、質的研究法によるパイロット研究を行うことである。3名の大学生に対して半構造化面接を実施し、その面接記録から抽出されたデータを、KJ法を用いて1枚の図解にまとめた。心理的自立に関しては、そのイメージは曖昧で、経済的自立と切り離して考えることが難しいとしながらも、自己中心的でなく相手や全体の利益を考えて行動できる人や、やりたいことを持ちつつも、その目標に向かって生活や行動面を律することができる人のイメージが挙げられた。心理的自立発達に影響した要因に関しては、親の養育態度による影響は意識されておらず、親友や相談に乗ってもらえる先輩との出会いによる影響が大きいと感じていることがわかった。心理的自立に関する質的研究法の可能性と今後の課題について検討した。

The purpose of this study was to examine how university students think about psychological independence and the factors contributing its development, piloting by qualitative research methods. Semi-structured interview was held with three university students. The data was analyzed and organized in a diagram, using the KJ method. Although the participants reported that the image of psychological independence was vague and it was difficult to understand its essence by differentiating from economical independence, they had some idea that people, who think about other's and/or group's benefit first, or who set their goals and self-govern to achieve them, were likely to be considered psychologically independent. Regarding the factors influencing the development of psychological independence, the participants did not consider that their parents' attitudes were important. Rather, they most valued the good relationship with close friends or senior friends. The implication and the limitation of this study were discussed.

キーワード：心理的自立 (Psychological independence) 大学生 (University students)
半構造化面接 (Semi-structured interview) KJ法 (KJ method)

問題と目的

自立は、青年期の発達課題として重要視されるが、人が持つ自立のイメージは曖昧である。その上、大学生という時期は、年齢的には成人する前後であるものの、社会的には学生という立場であり、経済的には親の力に頼るところが大きいことから、一般的に“自立している”とは言い難い。しかしながら、少なくとも、自己決定や行動のあり方等、いわゆる心理的な面においては、より“自立した”状態を求められる時期であり、その側面における自立発達は、大学生にとって特に重要と考えられる。よって本研究では、大学生の自立を考える上で、心理的自立に焦点を絞り、その概念を「自分の感情や考え、

行動に関して自ら主体的に管理・決定すること、かつ、それらに関して責任をもつこと」と定義する。

自立に関する先行研究の多くが、大学生の心理的自立発達に影響を与える要因として、親子関係を取り上げている。例えば、高坂・戸田 (2005) は、これまでの自立研究が親からの自立を問題にすることが多かったことを指摘し、青年・父親・母親の家族機能認知と青年の心理的自立獲得との関連について検討している。彼らは、心理的自立を「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を有した状態」と定義し、青年が家族機能を肯定的に認知しているほど心理的自立が高く、そこには両親の肯定的な家族機能認知が影響していることを報告している。また、親の支持・受容的な養育態度が青年の心理的自立発達を促進するという報告 (Grolnick & Ryan, 1989) や、青年が自分の行動について見通しや

*連絡先著者：山田裕子

自制をもてるような構造を親が与えることが、青年の心理的自立を刺激するという報告(Lamborn, Mounts, Steinberg, & Dornbusch, 1991)もあり、大学生の心理的自立に対する親の影響は大きいと考えられる。しかしながら、それらは質問紙調査による量的研究の結果であり、実際に大学生が心理的自立をどのように理解し、自分自身の自立発達について何に影響を受けたと考えているかは明らかではない。大学生が心理的自立についてどのように考えているのか、自分自身の心理的自立についてどう感じているのか、そして、自分自身の心理的自立発達に何が影響している(助けになっている)と考えているのか等について探究することは、現代の大学生像を理解するためにも興味深いことと考えられる。

半構造化面接法は、面接データを様々な方法で分析できることから、心理学の質的研究において最も広く用いられるデータ収集方法である(ウィリッグ, 2003)。この方法では、1つのテーマに関して、面接者がある程度決められた構造の中で質問をすることによって、方向性を逸脱しないように面接をコントロールしつつも、参加者はそのテーマについてオープンに語ることが許容されるため、質問紙調査からは得られない参加者の具体的・本質的な考えを知ることができる。また、KJ法(川喜田, 1967/1970)は、川喜田二郎氏がフィールドワークで集めた膨大なデータをまとめるために考案した方法であり、現在では、会議における発想的情報処理から書物の理解のため等、様々な領域で利用されている。この方法は、大量のデータからボトムアップ的に情報をまとめるため、既成概念にとらわれにくく、より自由な発想を得られる可能性を秘めていると言える。これまでの心理的自立に関する研究では、量的研究もしくは事例研究が中心であり、半構造化面接やKJ法によるデータ収集及び分析を行った先行研究は見当たらない。

そこで、本研究では、大学生の心理的自立及びその発達に影響を与えたと思われる要因について、大学生がどのように考えているかを探究するための手がかりとして、半構造化面接とKJ法を用いたパイロット研究を行う。半構造化面接によるデータ収集を行い、KJ法により1つの図解にまとめることによって、面接での語りの中から大学生自身が捉える心理的自立とその要因に関する基礎的なデータを得ることを目的とする。

方 法

(1) 調査対象者及び調査方法

異なる所属大学の大学生2名に依頼して、「大学生の心理的自立に関する調査」と題した本調査への参加・協力を、知り合いの大学生に呼び掛けてもらった。関心を

示してくれた学生に対して依頼状をメールにて送信したところ、私立大学Aの3名の大学生(3年/男性/20歳が2名、1年/男性/19歳が1名)が面接に協力してくれた。参加者の基礎データはTable 1に示す。1人当たりにつき約50分～1時間の半構造化面接を実施し、会話は参加者の許可を得て、ICレコーダーで録音記録した。実施期間は2009年7月下旬から8月上旬の間で、個別に都合の良い日程・場所で行った。交通費は支給したが、インセンティブはなく、本研究テーマに興味を持った学生、つまり、普段から自立について自分なりに考えている学生が調査に応じてくれたと思われる。

(2) 調査内容

心理的自立を「自分の感情や考え、行動に関して自ら主体的に管理・決定すること、かつ、それらに関して責任をもつこと」と定義した上で、心理的に自立している人のイメージや、自分自身の心理的自立の度合い、自身の心理的自立に影響を与えた人物や出来事に関する質問を中心に、半構造化面接を実施した。主な質問の内容はAppendixに示す。

半構造化面接により集めたデータについて、KJ法により分析を行った。具体的には、まず、録音記録を直接聞きながら、会話内容からエッセンスを拾い出してそれらを片端から紙片にメモしていく「紙切れづくり」を行った。その後、KJ法の手順に従ってグループ編成を繰り返し行い、その後図解化し、文章化した。

結果と考察

紙切れづくりにより、合計120枚(参加者Aが38枚、参加者Bが38枚、参加者Cが44枚)の紙切れメモが抽出された。それらは、最初のグループ編成により、60の小チームに分けられた。それらの小チーム群からさらにグループ編成を繰り返し、最終的には1枚の図解にまとめた。その図解は、Figure 1に示す。

まず、心理的自立をより具体的にイメージするために、身近な人で心理的に自立していると思う人物を挙げてもらい、その人物の特徴を考えてもらった。最初の段階で、心理的自立に限定してイメージすることは、参加者にとって思いのほか難しく、心理的自立に関する概念の曖昧さが確認された。参加者によっては、「心理的に自立している人」を「尊敬できる人」という形に置き換えて想像すると考えやすいとの意見もあった。複数の特徴が挙げられた中、参加者間で共通するものも多数あり、最終的に以下の8つにまとめることができた。1つ目は、「自分よりも相手や全体の利益を優先させる」という内容で、サークルや仕事の目的を達成するために自分を制

Table 1 参加者の基礎データ

	性別	年齢	学年	学部	家族構成
A	男性	20歳	3年	経済学部	父・母・姉
B	男性	20歳	3年	文学部	父・母・姉
C	男性	19歳	1年	薬学部	父・母・姉・兄



御し、全体の利益を考えて行動する姿を見ると、心理的に自立していると感じるとのことであった。2つ目は、「自分のことを主張するよりもまず、相手の立場に立って考え、行動できること」であり、そこには、「ルールを守ること」や「人の話をきちんと聞く」等も含まれた。1つ目、2つ目とも、他者や集団の利益を重んじる意見であり、和を大切にする日本の大学生に特徴的である印象を受けた。3つ目は、『やりたい』と『律する』が共にある」、つまり、自分のやりたいことや目標を持ち、それを達成するために自らを律するということが挙げられた。いくら主体的といっても、場当たり的な欲求だけでは自立とは言えず、長期的な目標とそれに向けた見通しを持って自分を律することの両方が必要という内容であった。4つ目は、「1人暮らしをしている」である。実際に1人暮らしをしている参加者は、1人暮らしをすることにより、身の回りのことや生活について自分で管理し責任をもつようになり、実家で暮らしていた時に比べて、主体性や責任感が身についたと言う。一方、実家で生活している参加者は、親元において家事全般をやっていることに対して引け目を感じ、自立できていないと感じるが、実家では家事を自分でやる機会がほとんどないという意見であった。しかしながら、同じ1人暮らしといっても、親からの仕送りを頼りに遊び暮らしているようでは、自立しているとは言えないという意見も付け加えられ、その前提には「きちんと生活を送る」ということが挙げられた。その他、「責任を自らとること」、「自分について熟知していること」、「自分で考え、行動していること」、「辛い思いをしても表に出さないこと」が、心理的に自立している人の特徴として挙げられた。

「自分で行動を決められず人に言われて動く」「人に言われて行動するので何のためかわからなくなる」という発言は、自立していない人の特徴としてまとめられた。本研究の参加者たちは、代返や講義ノートを安易に友人に頼る学生や、目的意識もなくただ大学に通う学生に対して批判的であり、「最近の大学生は人に頼りすぎだし、自分で考えなさすぎ」という厳しい意見も出た。参加者は3名とも、“平均的な大学生”よりも自分は自立していると考えており、同世代に比べて将来のことについて考え、その上で現在の学生生活を送っている自負を持っているのが特徴的である。とはいえ、まだ心理的に自立できていないと感じる点も複数挙げられ、「責任を取りきれない」「自分自身のことを整理しきれない」「葛藤してしまいなかなか決断できない」「思いつきで行動して後悔してしまう」等のように、何となく中途半端な自分に対する苛立ちや自信のなさといったようなものが感じられる意見が多かった。そして、そのように葛藤を抱えながらも、自己分析をしたり、目的意識を持って大学に通ったり、将来について考えたりしながら、自立を意識し、努力している姿が窺えた。

心理的自立発達に影響した変数に関しては、参加者3名とも「何でも話せる、心開ける友人との出会い」を第1に挙げた。進路や将来について真剣に考えている彼らにとって、本音でまじめに語り合える友人関係は心の大きな支えであり、そのような友人に出会えたことに対す

る感謝のことはもそれぞれから語られている。一方で、両親からの影響はあまり感じられていないという点でも共通しており、さらに2名は、「子育てに無関心な父親と子どもに対して非常に管理的な母親」という点でも共通していた。その内の1人は、児童後期から早くも管理的すぎる親の養育態度に疑問を感じ、親に従いきれなかったと言う。彼はもともと自分が納得したら行動する性格であったので、ある教員から聞いた話をきっかけに、自ら勉強する意義を見出したことが心理的自立につながったと考えている。また、もう1人は、大学に入るまでは親の言うままに主体性なくきたが、大学に入ってから様々な人々、中でも親友との出会いを通して自分の価値観を見直すことができ、生き方を変える努力をしたと言う。この2名にとっては、親の養育態度は「自立発達の助けとなる」どころか、ともすれば「妨げとなったもの」と感じられているかもしれない。しかしながら、それぞれの方法でその“壁”を乗り越えたことが、彼らの心理的自立の促進につながり、それを支えたのが「何でも話せる、心開ける友人」の存在であると思われる。これは、岡本・上地（1999）が述べたように、同性の友人との親密な関係が親に対する脱依存を促したと考えられる。近年、友人関係の希薄化が指摘されている（松井、1990）が、自己開示しあえるような友人関係を築くことは、大学生の心理的自立にとって大きな支えになることが再確認されたと言える。

親密な友人関係以外の人間関係でも、いくつか重要な示唆が得られている。1つは、サークルの先輩等、少し目上の人との関係が心理的自立に影響したということである。先輩は、相談に乗ってもらえる存在である他、先輩自身も葛藤し悩みながら進んでいるということがわかったときに自分も励まされたという意見があり、人生の身近なロールモデル的役割を果たしていると考えられる。また、その人自身は決して自立しているとは思えないが、自分とはまったく異なった価値観の人との出会いから学ぶことも多いという意見もあった。同年代で同質的な仲間との付き合いが中心だった高校までの生活とは異なり、大学では、自分とは異文化の人達との交流も増えるため、様々な価値観に触れて自分を見直す機会が得られやすいと考えられる。その他、実在の人物ではなくても、本の中の主人公や音楽の歌詞等、カルチャーから生き方や価値観が影響されることもあるということで、いろいろなものをいろいろな形で吸収できる時期と考えられるかもしれない。

対人関係だけでなく、個々の性格傾向も心理的自立発達に影響する要因として複数挙げられた。中でも「まじめ」で「人の話を良く聴き、良いところは取り入れる」傾向は参加者に共通しており、素直に相手から学ぼうとする姿勢が、他者の話に自己を照らし合わせて考える作業につながり、その作業を通して自己理解を深めているようである。人の意見や考えを取り入れることは、一見自分を確立することと矛盾するように思えるが、心理的自立に向けた過程にいる彼らにとっては、最初から頑なに自分の考えを固持するよりも、まず先人や先輩等、他者の経験や知恵から学ぶ柔軟な姿勢を持ち、その上で自分に必要なことを取捨選択する作業を繰り返すことに

よって、徐々に自分自身の価値観を形成しつつ、自立の方向へ進んでいくと考えられる。

自分自身や自分の将来について真剣に考えていることも、参加者全員に共通している点であり、心理的自立を促す重要な性格特性と考えられる。このような姿勢がどのようにして形成されたかは定かではない。ある参加者は、幼少期から自分なりの考えがあり、自分で納得できればやるし、やるときはほとんどやるタイプで、それは生まれ持った気質だと思うとのことであった。また、別の参加者は、高校卒業までは親の価値観に沿って生きてきたが、大学への入学、1人暮らし、親友を含む様々な人と出会いから、自分について考えるようになり、自分のあり様も変わったとのことであった。人によって、その時期やきっかけとなる出来事等は異なると思われるが、自分自身についてきちんと考える作業をすることは、心理的自立発達に必要と考えられる。

自立に影響したと思われる出来事については、大学受験、親の都合による引越し、いじめの克服、自動車免許の取得等が挙げられたが、それらの出来事自体は目新しいものではない。しかしながら、参加者の話を聞くと、その出来事自体よりも、それに対してどのように対処していったかということの方が、心理的自立発達に影響していることが窺える。例えば、大学受験自体は多くの人が経験することであるが、今回の参加者は皆、それに向けて自己分析し、自分の将来と大学で学ぶことをつなげて考え、その時の自分なりに自分で進路をきちんと選択したという体験をしている。ただ何となく選んだ場合とは大きな差であろう。そのように、何か葛藤を生むような出来事に出合ったときに、自分なりに真剣に取り組むという経験が、物事の判断力や決断力、対処能力を養うことにつながり、心理的自立発達を促進するのではないかと考えられる。

心理的自立発達に重要なこととして、様々な意見が挙げられたが、次の3点にまとめられると思われる。第1に、様々な体験をすることである。良いことだけでなく、辛いことや理不尽なことも体験することにより、我慢することや気持ちを切り替えることを学ぶことができるという意見はもっともと思われる。その他、人に共感する力を養うことや物事を考える上で視野を広げること等も体験から学ぶ必要があり、心理的自立発達にはそのような多面的な努力が求められると言えよう。第2に、心理的自立発達のためには、大人による子どもへのサポートがもっと必要である。ここでいうサポートは、物質的なものではなく、自分や将来、そして自立について考えるきっかけを提供したり、葛藤で悩むときに相談できたりということである。残念ながら、親密な友人関係の影響に比べて、心理的自立発達に対する親や先生等の身近な大人たちの影響は少なく、参加者からも、「学校の先生等の大人が、子どもに、自立についてもっと考えさせるようにしてほしい」という発言があった。ひきこもりやニート、その他、性格的に今一つ素直になれなかったり吸収力が足りなかったりする子どもたちはなおさら、同年代から学ぶことが難しいという可能性もあり、大人からの働きかけが重要と考えられる。第3に、前述したが、「何でも話せる友人の存在」は、親からの脱依

存を促進し、価値観の見直しや心の支えとして、心理的自立の発達に重要な役割を果たすと考えられるし、参加者からもその重要性は示唆されている。しかしながら、彼らのように、そのような関わりを自ら積極的に作れる人もいれば、そこで躓きを覚える人も少なくないであろう。近年は、友人関係が希薄化しているということを考えても、求める友人関係が得られない場合も大いにあり得る話である。そのような場合は、学生相談室等の専門機関を利用してみることも1つの選択肢である。友人関係とは関係の質が異なるものの、安心空間で自分について落ち着いて語れる場をもつということは、心理的自立発達に役に立つと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、半構造化面接により参加者たちの語りの中からたくさんの情報を集め、それをKJ法によって1枚の図解に整理することで、参加者たちが、心理的自立のイメージやその発達に影響する要因について、どのように考えているかを具体的に理解することを試みた。このような形で整理してみると、参加者の中に「心理的自立」に対するイメージが定まっていなかったことがわかった。心理的自立を経済的側面と切り離すことが難しく、経済面での引け目から何となく全体的に自立できていないと感じてしまっていたが、本研究での面接を通して、意外と成長している自分を発見したという感想も得られた。先行研究の知見とは異なり、参加者自身は、心理的自立発達に関して、親からの影響はないと感じていた。親の養育態度への疑問に加え、親密な友人関係の影響等による新たな価値観の形成が、親からの脱依存につながることから、親の影響よりもポジティブに働く友人関係の影響が意識されているようにも思われる。今回の参加者たちは、心理的自立発達の過程において、様々な経験をやる機会や多くの人々との出会い、大人や身近な先輩からのサポート、そして、何でも話せる友人を求めている。それらとの関わりを通して自己分析を深め、自らを高める努力をしており、そこには自立に真剣に取り組む若者の姿が見られた。このような洞察を得ることは、質的研究ならではの利点と考えられる。

本研究では、このようにいくつかの有益な知見が得られたが、次に問題点と今後の課題について触れておきたい。第1に、本研究はあくまでパイロット研究であり、参加者数は少なく、男性のみであることから、結果を一般化することはできない。今回協力してくれた3名は、自立について特に普段から意識し真剣に取り組んでいる学生であり、参加者本人たちも述べるように、いわゆる“平均的な大学生”に当てはまらない可能性も高い。より“平均的な大学生”像を把握するには、参加者の集め方を工夫し、彼らが述べるところの、「代返や講義ノートの借用が日常的であり、目的意識なく大学に通っている学生たち」等、いわゆる心理的自立というテーマにあまり興味を抱かない大学生も含めて、男女共に、より多くの参加者を得ることが必要であり、今後の課題と言えよう。第2に、今回はパイロット研究であり、データ収集と分析は1人で行ったが、KJ法による分析は主観に

よる部分が大きいことから、個人の先入観や偏見の影響をなるべく最小限にとどめるためにも、できれば複数の目で分析が行われることが望ましいと思われる。

謝 辞

最後に、本研究の主旨を理解し、参加者集め及び面接調査に参加・協力してくれた学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- Grolnick, W.S., & Ryan, R.M. (1989). Parent styles associated with children's self-regulation and competence in school. *Journal of Educational Psychology*, **81**, 143-154/
- 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために—中公新書
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法—KJ法の展開と応用—中公新書
- 高坂康雅・戸田弘二 (2005). 青年期における心理的自立 (Ⅲ) —青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響—北海道教育大学紀要 (教育科学編), **55**, 77-85
- Lamborn, S.D., Mounts, M.S., Steinberg, L., & Dornbusch, S.M. (1991). Patterns of competence and adjustment among adolescents from authoritative, authoritarian, indulgent, and neglectful families. *Child Development*, **64**, 1049-1065.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫 (編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店. pp. 283-296
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, **47**,

248-258

Willig, C. (2001). *Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method*. Buckingham: Open University Press./上淵寿・大家まゆみ・小松孝至 共訳 (2003). 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて—培風館

Appendix

本調査では、心理的自立を以下のように定義します。

心理的自立：

「自分の感情や考え、行動に関して自ら主体的に管理・決定すること、かつ、それらに関して責任をもつこと」

〈半構造化面接における主な質問内容〉

1. 上記の定義をもとに、心理的に自立している人を具体的にイメージしてみると、それはどのような人ですか？
2. 上記の定義から考えると、あなた自身はどの程度心理的に自立している状態だと思いますか？ 0 (全く自立していない) ~100 (完全に自立している) で評価するといくつくらいでしょうか？なぜそのように思いますか？
3. ここまでのあなたの心理的自立発達に影響を与えたと思われる人物や人間関係について教えてください。
4. ここまでのあなたの心理的自立発達に影響を与えたと思われる出来事について教えてください。
5. 10年後の自分について考えた時、今と比べてどれくらい心理的に自立した状態になっていると思いますか？ (0 ~100評価) なぜそのように思いますか？